

柔道専門分科会企画

テーマ「受身の最新研究から学校柔道安全確保の道を探る」

講 師：藪根敏和（京都教育大学）

村山晴夫（獨協医科大学）

司 会：桐生習作（公益財団法人講道館）

日時：平成 27 年 9 月 10 日（木）13：00—14：30

場所：日本体育大学世田谷キャンパス 教育研究棟 2 階 1201 教室

<趣旨>

近年、本部及び本会において行政、現場教員、研究者など様々な方面から有識者を招き、中学校武道必修化をとりまく現状とその課題について理解を深めてきた。柔道の学術団体としての本会の使命を鑑みれば、学校柔道の課題に対して最新の研究成果を共有し、また斯界の有識者を交えた活発な意見交換が必要といえる。

教員の指導力、設備・施設、行政のサポートなど、本会で取り上げるべき課題は多々あるが、限られた時間の中で総論的に取り上げれば議論が深まらず、また内容がこれまでの企画と重複してしまう懸念もある。

そこで今回は受身をテーマとし、本テーマに関する最新の研究成果を有する研究者を招いて講演いただく。受身は初心者指導法、基本動作、安全確保など、学校柔道のあらゆる分野を包含する重要な概念である。講師の方々の研究成果とその姿勢を通じ、改めて柔道の専門家が学校柔道の安全確保に向けて果すべき役割と、そのために必要な取り組みについて考える場としたい。

<プログラム>

13:00 趣旨説明・講師紹介

13:10 村山晴夫氏 講演「受身がもたらす頭部への衝撃緩衝メカニズムを探る」
質疑応答

13:50 藪根敏和氏 講演「よい受身動作とその学習法」
質疑応答

14:30 まとめ

※終了後、総会

<参加資格>

日本武道学会員、本会員または第 48 回日本武道学会大会の参加費納入者

< 講師略歴・講演要旨 >



藪根 敏和 YABUNE Toshikazu

兵庫県出身。講道館柔道七段。京都教育大学教授。修士（体育学）。「発見型柔道授業プログラム」の開発と発信を図る。武道必修化に伴い、関西を中心に指導者研修会の講師としても活躍中。

運動学習とは、一般に「視覚等からの情報を運動像としてイメージ化し、それを身体で再現して、さらに自動化させる過程」と解される。従って、運動学習においては、その前提として、基準となる動きの指標が明確になっている必要がある。この動きの指標とは、優れた動作に共通する構造的な特徴、換言すれば、それは「よい動きの構成要素」ともいえるもので、この指標が明らかになれば、学習者は到達目標を持つことができ、それに近付けるように努力することができるし、指導者は練習方法の工夫や、動作のチェックポイントの発見ができるようになる。

受身は、柔道を安全に学習するために欠くことができない技術である。しかし、「柔道の受身は腕で畳を強く叩く動作である」という既成概念にとられるためか、はたまた、「後る受身、横受身、前回り受身の順で単独練習を進めていく」という練習方法が確立しているためか、指導者や研究者の関心は「畳に衝突した際の衝撃をどのような動作で分散させるのか」という本質的な問題の解決には向かわず、特に対人での受身動作に関しては、運動学習の核となるべき動作の指標が明らかになっていないのが現状である。このような現状のまま学習成果を期待することは、ナンセンスであろう。

そこで今回は、受身の学習目標となる「よい受身動作」とはどのような動作なのかを解説するとともに、その動作獲得のための学習方法の一例を紹介したいと思う。



村山 晴夫 MURAYAMA Haruo

茨城県出身。講道館柔道七段。獨協医科大学准教授。博士（医科学）。本会理事。2013年4月より科研費基盤研究（C）「柔道における頭部外傷発生メカニズムの解析と効果的予防対策の確立」をテーマに研究中。

柔道における死亡事故の多くは頭部外傷に起因し、投げられた際の畳への頭部強打が主な原因である。このような重症頭部外傷事故が顕在化しているのにも関わらず、柔道の投技による頭部への衝撃力については、これまで科学的に解明されてこなかった。すなわち、教育現場で起きている重症事故要因を明確に特定できず、効果的な予防策を講じるためのエビデンスが欠如している状況である。このような背景のもと、私たちの研究チームは“柔道における頭部外傷発生メカニズムの解析と効果的予防対策の確立”というテーマに着手した。具体的には、柔道の投技で投げられる際に生じる頭部加速度動態から頭部外傷リスクを定量評価することで、受身を遂行できない状況での頭部外傷発生機序について解明することである。まず、自動車安全対策分野の方法論を適用し、自動車衝突試験用歩行者ダミーを用いることで解析を行った。これにより、受身という技術を駆使することなく頭部を打撲した場合の頭部の衝撃力（頭部加速度など）が数値化される。そして、“人”による受身技術を駆使した場合の頭部衝撃力をも測定し、ダミー実験の結果と対比させることで、受身がもたらす衝撃緩衝効果の解明にも取り組んでいる。今回、現時点で得られている最新の研究知見を紹介するとともに、“受身”という技術の重要性について再考する機会としたい。